

幼稚園児を育てる母親に対する 人類遺伝学の話題提供とその反応

森屋宏美^{*1}

I. はじめに

遺伝子研究成果の社会還元が進んでいる。このため、一般市民に対する遺伝教育の重要性が唱えられている(WHO, 1997)。一方で、日本は人類遺伝学を学ぶ機会が少なく、遺伝リテラシーが不足しているとの指摘がある(櫻井, 2011)。本研究は、先行研究で対象とされていない幼児を育てる母親に対し、人類遺伝学に関する話題提供を行い、その反応を明らかにすることを目的とした。これは、市民に対する人類遺伝学の教育方法を検討するための一資料となる上で意義がある。

II. 方法

1. 対象者

A 幼稚園 1 施設で195名の保護者に対し研究概要を案内し、後日集まった参加希望者に対し、研究目的、方法、倫理的配慮を説明し、同意書を取り交わした。幼稚園児の母親7名が参加した。

2. 期間

2010年12月～2011年2月

3. データ収集および分析

遺伝医学を専門とする教育者1名により、60分間の人類遺伝学に関する話題提供を行い、これに対する反応について個別インタビューを実施した。インタビューは、ICレコーダーに録音し逐語録とした上で、人類遺伝学の学びに関する文脈を抽出し、関心を持った話題ごとにテーマをつけた。最後に、話題提供一覧を作成し、インタビューで語られなかった話題と比較をした。

4. 倫理的配慮

東海大学健康科学部倫理委員会の承認を得て実施した(第10-16号)。

III. 結果

1. 対象者の属性

対象者である母親には幼稚園児の他、未就園児から小学生までの子どもがいた。母親の子どものうち1名が先天異常をもち、母親のうち1名が妊娠中であった。

2. 関心を持った話題

インタビュー結果とこれに関連した話題について、以下に示す。「」は生データであり、発言者をA-Gで記載した。

(1) 人と人の違い

人の塩基配列の個体差は0.12%である。これに対し、人とチンパンジーの個体差は1.2%であることを説明した。B、Gは塩基配列の差に関心をもち、「G 小さな数字の違いが大きな多様性を生む」ことに感心していた。Gは、「動物園に行ったら子どもとの話題にしたい」と、育児への活用に意欲をみせた。

(2) 遺伝と環境

病気は、遺伝要因と環境要因の影響によって発症することを説明した。Bは、「遺伝と環境のバランスが病気を決める」ことに驚き、Dは、「中毒の重症度が生死を決めた事件」を振り返った。突然変異と自然淘汰の説明からは、子どもが先天異常をもって生まれたことに「納得した」「当初の衝撃が和らいだ」との感想もあった。

(3) 出産・育児の話題

つわりが妊娠中に特有の生体防御機構であるという話題に対し、妊娠中のDは、「頭の中で理解しながらつわりと戦うことができている」と生活に生かしていた。他には、「B 身長と肥満」「B 鉄と病気」「C 子どもの野菜嫌い」「D 今と昔の女性の生活スタイルの違いと癌」が印象に残ったこととして挙げられた。「B 日常生活に密着した」「D 現実の話」「D 実践的な話」といった身近な話題が多くあがった。

*1 東海大学健康科学部看護学科

3. インタビューで語られなかった話題

以下に、話題提供をしたが、インタビューでは語られなかった内容を挙げる。

(1) 遺伝学の用語：ゲノム、染色体、遺伝子、DNA、塩基、の構造や機能。

(2) ヒトゲノムプロジェクト：人の全塩基配列を解析する世界的研究計画。

IV. 考察

結果より、幼稚園児を育てる母親は、日常生活に関連する話題には関心を持つことが多く、一方で、人類遺伝学の用語や研究計画など、日常生活には直接関わらない話題には関心が薄いことが示唆された。遺伝教育には、

人類遺伝学の基本である遺伝継承と人の多様性が生じる仕組みを科学的に理解することが欠かせない。このため今後は、日常生活に関わらない話題提供方法の工夫について検討し、より汎用性のある遺伝教育方法を明らかにすることが課題となる。

参考文献

櫻井晃洋 (2011) : 人びとは“遺伝”をどうとらえているか—日本人の遺伝と遺伝子に関する意識, 医学のあゆみ, 237 (2), 215-217.

WORLD HEALTH ORGANIZATION (1997). 松田一郎・友枝かえで (訳) : 遺伝医学と遺伝サービスにおける倫理問題に関する国際ガイドライン” <http://jshg.jp/e/resources/data/WHOGuideline.pdf>, (参照2015 - 08 - 08).